

新技術名：リンゴ主要害虫に対する新殺虫剤の実用化（昭和63年～平成6年） ④・参
（オリオン水和剤の防除効果）

研究機関名 果樹試験場環境部虫害担当、鹿角分場
担 当 者 高橋佑治・大隅専一・舟山 健

I 新技術の解説

(1) 要 旨

○ね ら い

カーバメート系殺虫剤オリオン水和剤のリンゴ主要害虫に対する防除効果を検討し、防除の安定かと実用化をはかる。

○経過と方法

ハマキムシ類に対しては、室内で接触、食毒による殺虫効果を検討し、モモンクイガに対しては卵令別の殺卵効果と圃場での防除効果を検討し、ギンモンハモグリガに対しては食入前に散布し防除効果を検討した。

○技術の要旨

オリオン水和剤1000倍は、ハマキムシ類に対して遅効的であるが防除効果が高くモモンクイガに対しては、卵令に関係なく食入防止効果が高く、また、圃場での防除効果が合成ピレスロイド剤のアディオン水和剤2000倍と同等であり、ギンモンハモグリガに対しても対照薬剤と同等の防除効果が認められ、平成7年度防除基準に採用した。

(2) もたらされる効果

- ① モモンクイガ、ハマキムシ類、キンモンホソガ、ギンモンハモグリガ、アブラムシ類に登録され、これら主要害虫の同時防除が可能である。カーバメート系殺虫剤で有機リン剤と作用性が異なり、これら抵抗性系統にも効果がある。
- ② 薬剤調合の省力化になる。

(3) 普及対象範囲

県内全域

(4) 普及上の留意事項

1. 1000倍でハマキムシ防除期に当たる6月下旬、8月上旬を主体にして他の害虫との同時防除を行う。
2. 収穫14日前まで5回以内 劇物 B類相当
3. ジチオカーバメート剤（パルノックス、アントラコール）、ボルドー液、葉面積散布肥料等と混用しない。また、他剤と混用すると沈殿しやすいので攪拌をよくする。

(5) 発表文献等

II 具体的なデータ等

表一 1 ミダレカクモンハマキ4～5令虫の殺虫効果（平成2）

	希釈倍数	供試虫数	処理2日後死虫数	3日後死虫数
オリオン水和剤	1000	10	9	10
ダーズバン水和剤	1000	10	10	10
無処理	—	10	0	0

処理日：5月14日

表一 2 リンゴコカクモンハマキ5令虫の殺虫効果（平成2）

	希釈倍数	供試虫数	処理2日後死虫数	4日後	7日後
オリオン水和剤	1000	19	10	15	15
ダーズバン水和剤	1000	19	8	11	11
無処理	—	19	0	0	0

処理月日：8月27日（ダーズバン抵抗性系統）

表一 3 モモンクイガの卵令別食入防止効果（平成元）

	卵令	供試卵数	死卵数	ふ化死数	食入率
オリオン水和剤 1000倍	1	19	17	2	0
	2	11	10	1	0
	3	24	22	2	0
	4	16	8	8	0
	5	12	11	1	0
	6	21	16	5	0
	7	20	19	1	0
無処理	1	18	4	0	77.8
	2	14	2	1	78.6
	3	14	3	0	78.6
	4	15	2	2	73.3
	5	12	1	0	91.7
	6	19	1	2	84.2
	7	19	2	2	78.9

処理月日：8月3日 調査月日：8月23日

表一 4 モモンクイガの防除効果（平成6）

	希釈 倍数	9/19樹上調査			11/10収穫調査		
		調査果数	被害果数	被害果率	調査果数	被害果数	被害果率
オリオン水和剤	1000	200	0	0	204	0	0
アディオ水和剤	2000	238	0	0	254	0	0
無散布区	—	259	259	100	227	227	100

散布月日：7/4、7/28、8/18 ふじ

表一 5 ギンモンハモグリガの防除効果（平成元、鹿角分場）

	希釈倍数	調査新梢数	被害新梢数	被害個数
オリオン水和剤	1000	60	4	6
スプラサイド水和剤	1500	60	8	10
硫酸ニコチン	1000	60	9	12
無散布区	—	60	15	48

散布月日：6月6日 調査月日：6月27日

発行年月	9506	キーワード	253
基礎分類	35	キーワード	
作目名	35	キーワード	